

全国環境教育ミーティングの紹介

中村 真一郎

環境教育ミーティング中部実行委員会
〒920-2326 石川県石川郡吉野谷村木滑り14

要約： 現在、各地域で「環境教育ミーティング」が開催されている。各ミーティングの概要を紹介し特徴の整理を試みた。また、2000年11月に行われた「環境教育ミーティング中部2000inいしかわ（事務局：特定非営利法人河北潟湖沼研究所）」についても報告し、今後の石川県内での環境教育活動の展開を展望した。

キーワード： 環境教育，ミーティング，石川県

序論

近年、各マスメディアでの報道や地域活動を通して世間の環境問題への関心は高まっている。深刻な環境問題解決のためにも、個人レベルのリサイクルから国際的な条約や規制まで幅広い取り組みが行われている。環境問題解決のためには主に、法律・規制、技術革新・改革、環境教育・学習の3つの方法があると言われる(川嶋,2000)。中でも環境教育は、人類がこの地球上で生きていく上で身に付けなければならない自然環境に関する正しい理解と、それに基づいた行動を促すといった、根本的な人々の意識改革の観点から重要視されている。

環境教育の基本的な目的は、人間と環境のかかわりを明らかにし、さらに人間の恒久的生存のために現在の環境状態を調査し、評価・判断しながら人間と環境のかかわりの変化を予測し、どう行動したらよいかを学ぶことにある(環境学習のための人づくり・場づくり編集委員会,1995)。当然、個人の環境倫理に基づく実践や活動だけでは意味を持たない。その実践や活動を広く情報発信し一般化させ、地域的、社会的、国際的に取り組んでこそ効果が発揮される。わが国でも様々なレベルで多種多様な取り組みが行われている。ここでは事例として環境

教育の実践者や関心のある人々の集まりの場として各地で行われている「環境教育ミーティング」に注目し、発足経緯と全国への広がりを紹介する。また、各ミーティングの特徴を報告書等より整理した。最後に2000年11月10日～12日にかけて石川県白峰村にて行われた「環境教育ミーティング中部2000inいしかわ」についても報告し、これを契機とした今後の石川県内での環境教育活動の発展を展望した。

環境教育ミーティングと日本環境教育フォーラム

表1に各地での環境教育ミーティング(以下ミーティング)の実施状況をまとめた。ミーティングの始まりは、1987年9月28～29日にかけて山梨県清里にて行われた「第1回清里フォーラム」が最初である。職種や団体を超えたプロの自然保護関係者の集まる「場」として実施されたものであり、画期的なことであった。全国の国立公園、サンクチュアリー、レンジャー、博物館の学芸員、大学の野外活動施設の先生、自然保護団体の職員、行政の自然保護担当者など約100名が集まり、様々な現場からの実践報告や、日本中でどのような環境教育活動が行われているかが報告され、分科会による

表 1 . 全国環境教育ミーティング実施表

| | 北海道 | 東北 | 清里 (関東) | 中部 | 千川 (関西) | 中・四国 | 久住 (九州) | 青年 |
|------------|-----|------|------------|------|------------|------|------------|------|
| 1987(昭和62) | | | | | | | | |
| 1988(昭和63) | | | | | | | | |
| 1989(平成元) | | | | | | | | |
| 1990(平成2) | | | | | | | | |
| 1991(平成3) | | | | | | | | |
| 1992(平成4) | | | | | | | | |
| 1993(平成5) | | | | | | | | |
| 1994(平成6) | | | | | | | | |
| 1995(平成7) | | | | | | | | |
| 1996(平成8) | | | | | | | | |
| 1997(平成9) | | | | (愛知) | | (広島) | | (清里) |
| 1998(平成10) | | | | (岐阜) | | (広島) | | |
| 1999(平成11) | | | | (岐阜) | | (鳥取) | | (清里) |
| 2000(平成12) | | (福島) | | (石川) | | (岡山) | | |
| 2001(平成13) | ? | (岩手) | | (静岡) | | | | ? |

* は実施終了, は実施予定, はプレミーティング(2000年12月31日現在)

問題提起と議論が行われた(清里環境教育フォーラム実行委員会, 1989)。1988～91年には「清里環境教育フォーラム」と名称を改め、環境教育としての「プログラム」、「施設」、「学校」、「地域社会」、「人づくり」、「事業化」といった切り口によって研究や議論がなされた。そして5年間の研究やネットワークの成果として「日本型環境教育の提案」を発表し、解散された(清里環境教育フォーラム実行委員会, 1992)。

90年代に入り、社会の「環境への気づき」が生まれたことなどを背景として、「個人のつながり」のみでなく、環境教育の「市民への広がり」を新たな目的として加えた「日本環境教育フォーラム」が92年に任意団体として発足した。1997年には環境庁所管の社団法人組織となり、現在に至っている(川嶋, 1998)。

この清里ミーティング(フォーラム)以降、「広がり」の成果として90年代後半から全国各地でミーティングが開催されるようになり、地

域ネットワークの発展やワーキングネットとしての活動へと広がっている。いずれも清里での「出会い」が原点と言える。

各種の研究会や学会(日本環境教育学会など)との相違として「フォーラム(広場)」という性格が挙げられる。つまり会員の有無や、知識や経験、価値観の相違を越えた水平、平等な立場から環境教育を捉える「場」としての位置付けである。専門性をもとめた「場」ではなく、市民へ開放された「広場」である。この基本的な目的は、現在各地のミーティングにも共通する点が多い。ミーティングは「環境教育」をキーワードに各種団体、企業、行政、市民、教師、学生など、職種や団体・社会的地位・世代間を越えた交流と情報交換による相互の刺激から、より効果的な日本型環境教育の可能性を研究・議論し、ネットワーク(水平なつながり)から活動への実践を目的とした「市民広場」といえる。

各ミーティングの特徴と取り組み

現在各地域ごとにミーティングが行われているが、「Think Globally , Act Locally 」といった観点や、専門家だけでなく市民参加型の開かれた学びの場の提供としている点から評価に値するものである。

以下に現在まで行われた各ミーティングを、報告書・資料・ホームページ、著者の参加経験（清里、中部、千刈）などから整理し、著者なりに汲み取った特徴等を紹介する。なおミーティング名称については各地域名に統一した。

北海道ミーティング

清里ミーティング参加者の報告会より発展したものであり、目的として 道内における環境教育の普及啓蒙、地域ネットワークの掘り起こし、ワークショップ形式の相互体験理解を主としている（丸山、1995）。1998年からは「環境教育」は限定的に捉えられる恐れがあるため「環境接点ミーティング」に名称を改変した。（財）北海道環境財団とのパートナーシップなど、ミーティングを広く捉え、多種多様な参加者を受け入れようとする工夫や姿勢は注目したい。また、ミーティングを定期的（2ヶ月に1回程度）に開催していることが他地域にはない特徴として挙げられる。その効果として、高頻度な交流・ネットワークによる、人脈形成やワーキングネット確立のスムーズ化、多様なワークショップ・分科会での話題提供のスピードと刺激による、短時間で多角的観点の養成、高頻度開催による、ミーティング自体の一般化と市民を含めた効果的な学習の場の提供が考えられ、参加者、実施者、地域にとって効果的な相互学習の場として機能していると考えられ評価できる。しかし、企画・運営母体である実行委員会の負担は大きい。負担分散の工夫として、毎回中心となる企画者が変わるという「リレー企画方式」や、市民の希望によっては企

画準備から参加できるなど柔軟な運営を行っている。企画内容によってスタイルが大きく変わることもあるが、「環境」をキーワードに「野山のウンコ」、「般若心経」など様々な観点からゲストや参加者の話を聞き、語り合うスタイルを基本としている（環境接点ミーティングをつくる「黒子（くろこ）」の会、1997）。

気になる点として、過去13回（1995年3回、1996年1回、1998年4回、2000年5回）開催されている中で、大雪山、釧路湿原、知床半島などに代表される自然資源や、アイヌ文化や開拓史をテーマとした北海道らしい企画内容が資料上ではあまりみられないことがある。1995年には「エコツアーグループ」が結成されており、原生自然環境や歴史的文化からのアプローチの表面化を今後期待したい。

東北ミーティング

1997年の清里ミーティングにて、東北からの参加者と東北に思いを寄せる仲間との交流が発展したものである。東北の自然や文化に関心を持って活動している、あるいは活動しようと思っている人、またそれらに関心がある人とが出会い、多くの情報交換、交流を通じたネットワークの形成と、新しい東北を発見することを出発点として開催されている。当初の目的として、東北に根ざした環境教育の発展、東北らしい個性あふれる地域づくりが挙げられる。開催地は東北各県が「持ち回り方式」で実行委員会を結成し企画・運営を行っている（環境教育東北ミーティング98実行委員会、1998）。

1998年から過去3回開催されているが、新しいミーティングであることや資料が少なかつたため、まだ特徴が見えてこない。しかし、東北ならではの風土や土地柄を生かしたプログラムと、学校、家庭、社会、NPOなどをキーワードとしたプログラムとのバランスは、ミーティング期間中、参加者にとって広く東北を見つめ直す絶好な機会となるであろうと感じた。また、

開催地が各県持ち回りのため、開催地(県)レベルでの小回りの利くネットワークや市民への環境教育の広がりも期待できる。ミーティングやネットワークを契機とした具体的な新しい動きも始まっている。新たな地域振興のモデルと思われる「最上エコポリス計画」や施設、プログラム、インタープリターを設置した「自然学校」も立ち上がっており、近年の東北における環境教育をふまえた活動には成長を感じる。また、地元住民や市民活動による生活・自然環境を素材としたむらおこし、地域づくりなども活発であり(清里環境教育フォーラム実行委員会,1992)、今後、東北独特なミーティングに注目していきたい。

清里ミーティング

環境教育関係者の全国的ミーティングとして、1987年から開催されている。先にも述べたように当初は実行委員会形式による任意の集まりで「清里(環境教育)フォーラム」として5年間開催したが、主催母体が1992年に任意団体、1997年には社団法人化し現在は(社)日本環境教育フォーラム主催の「清里ミーティング」となっている(川嶋,1998)。ミーティングを全国各地へ広げた「きっかけ」となり、わが国の自然体験型環境教育ネットワークにおいて歴史の長い、バイオニア的ミーティングである。また、日本における環境教育の先端的な情報や人材も多く集まり、ここでは紹介しきれない様々な幅広い内容(環境教育プログラムの企画、自然学校の運営や実施、町づくりや人材養成等)が実験的ワークショップや事例発表、分科会を通じて行われている。

あらためて環境教育に対しての幅広い意味での必要性と可能性を強く実感し、ミーティングを通じて個人、集団としての環境教育上の位置や役割、参加後に自分がすべきことは何かを自ら考え、気づき、浮き彫りにしてくれるミーティングである。また、ミーティングの運営や

進行もしっかりしており、母体である(社)日本環境教育フォーラムや(財)キープ協会などの協力や実施経験、ボランティアスタッフなどの活躍によりミーティング自体が目的をもった環境教育プログラムであることを示唆しており参考となる。

毎年参加者が定員を超えており、飽和状態であることはミーティングの内容的価値や参加者の意識が高いことを表している。定員を設定することは運営上仕方ないことだが、環境教育の広がりや普及の意味からして、新しい参加者の受け入れを意識した募集方法を考えても良いと思われる。参加者の固定化や同窓会的雰囲気は悪いことではないが、注意しなければならないことであろう。また、参加者の需要に対する実施者側の負担は大きい。清里を含めた関東一円での持ち回り開催も、実施側の負担軽減、マンネリ化の防止、新たな刺激による参加者の拡大とネットワークの構築につながるものとして期待できる。

中部ミーティング

名古屋で環境教育に携わる仲間が、環境教育の新鮮な情報にもっと触れ、勉強したいという思いから、清里のようなミーティングを東海地区でもできないかと話し合われ、1997年プレミーティングの開催より始まる(環境教育ミーティング中部98実行委員会,1998)。東海地区で環境教育を実践している人達の集まりから、中部地区へとネットワークを広げることを目的のひとつとしている。開催地は中部各県が自主的な「持ち回り方式」で実行委員会を結成し企画・運営を行っている。

中部は議論、研究の場である分科会だけでなく、ミーティングを環境教育関係者の「内輪の会」にとどめないためにも、広く一般市民への普及という意味から「公開プログラム」を実施し、一般に対して参加を呼びかけている(環境教育ミーティング99実行委員会,1999)。1999

年開催地の岐阜県清見では、公開プログラムに350名、ブース展示に約4500名の一般参加者があった。一般参加者、ミーティング参加者、実施者との「共育」を内包させたスタイルが特徴といえる。開催地周辺の市民と成果を分かち合うため、またそれぞれの地域ネットワークのきっかけを考え、実際に環境教育を実践する場として機能している。

公開プログラムは市民へのアプローチのひとつと思われるが、逆にテーマや問題提起を掘り下げたための分科会やワークショップが、時間不足となり希薄化する傾向を感じる。2泊3日という時間内で、効果的で学びの深い分科会と公開プログラムの両立を目指すのであれば、さらなる運営面での工夫や時間的配慮が必要であろう。まだ開催4回と新しいミーティングのため、現在まで踏襲されてきたスタイルにこだわることなく、開催地ごとによる柔軟で、実験・試験的な企画や運営を行ってもよいのではないかと思う。さらなる効果的なミーティングスタイルを模索することで、中部の可能性は大きく広がり、全国の各ミーティングへのフィードバックにつながるかもしれない。中部に属する石川県の市民としても今後の開催に注目したい。

千刈ミーティング ~地球市民を育む環境教育のありかたを求めて~

1991年の清里ミーティングで、関西でもこのようなネットワーク集会ができないかという話を持ち上がった。水平かつ公平なネットワークを意識し、幅広い環境教育分野での新しいネットワークの掘り起こし、「環境」とは異なる分野の人が集まるミーティングを目的とし、1994年から開催されている。実行委員会は毎年「この指とまれ方式」で組織され、企画、運営から市民へ開放されている。

参加経験から「ワークショップ」という新しい学び方の衝撃は忘れられない。何かを作り出す作業のための集まり(ワーキング・セッション)

を意味しているワークショップは、「それぞれの立場でそれぞれの価値観を持つ個人が、知識や経験の有無に関係なく、水平な人間関係をベースに、相互のコミュニケーションを大切にしながら、楽しい雰囲気の中でより生産的な結果を生み出そうとするものである。また、それぞれのゲストによるそのかしにより刺激され、示された課題やテーマをその気になってみんなで行い、そこでの結果や体験を分かち合い、振りかえりを通して自らの気づきを学びとして深める。こうした一連の流れの中で豊かな経験を目指す活動のこと」と位置付けられている(千刈ミーティング実行委員会,2001,ホームページより引用)。当初、千刈の多彩なワークショップのテーマからは、環境教育との関連性が見えにくいものであった。しかし、ワークショップに参加し、根本的な思いを形にしていって作業を通じての自己表現や他者との協力、主張と妥協を行う中で、環境教育としての新たな視点を得ることができたとともに、自己の再発見や様々な要因とのつながりを気づかせてくれるものであった。中には、感極まり涙を流す参加者もいた。ワークショップの内容もさることながら、促進役としてのファシリテーターの技術的な高さや熱意も感じられた。実施者からの「環境教育は関係教育だ」という言葉が印象深い。

アイスブレイクとしてのオープニングコンサート(ステージ)、刺激的な基調講演、関西風のワークショップへと続くプログラムを基本とし、総合的にシンプルかつ学びの深い企画内容や運営が特徴であり参考となる。

中・四国ミーティング

中・四国は、環境教育や環境保全、自然保護などに関心がある個人、団体、企業、行政などが交流し、情報やノウハウを交換するための出会いの場をつくり出すとともに、個別の取り組みをつなげることにより、地域を越えた動きを

つくり、活動を広げ、深めることで「持続可能な社会」の実現に寄与することを目的に1997年より開催されている。中・四国9県の独自の自然や文化、地域に根付いた環境教育と発信、地域ネットワークの活性化のためにも、開催地は各県が「持ち回り方式」で開催することを当面の目標としている（中・四国環境教育ミーティング99実行委員会、1998）。

ミーティングにおけるネットワークを一過性のものとせず、日常活動へ広げていくために、運営母体である任意団体「中・四国環境教育ネットワーク」を1997年に設立し、200名以上の会員が登録している（中・四国環境教育ミーティング98、1998）。目的として、中・四国地域内の環境教育に関する情報の収集と提供、個人、団体間の交流の促進、人材の育成などを通じた環境教育の必要性、重要性を広く普及啓発することとし、ミーティングはそのひとつとして位置付けられている（中・四国環境教育ミーティング99実行委員会、1999）。

年4回の季刊紙の発行やミーティングで提案された内容についてのフォローアップ等、まだ新しいミーティングではあるが、生きたネットワークとして実践していることは特徴として注目したい。ミーティングを単なるイベントとして終わらせないためにも、このような事後における方向性は重要であり参考としたい。

久住ミーティング

九州地域を中心に幅広く環境教育に関心、興味を持つ個人・団体の交流促進や環境関連団体、学校、行政、企業などにおける環境教育の活動支援となる研修会等を含み、1997年より年度ごとに開催されている。当初、ミーティングは開催県である大分県の主催事業として1997～1999年にかけて実施されてきた。これは5カ年計画（平成6～10年度）ですすめられた「地球にやさしい村事業（大分県久住町）」の一環としてミーティングが位置付けられていたためであ

る。1999年には参加者やボランティアによる市民主体の実行委員会を発足させ、県の事業終了後の2000年より、官民合意のもとミーティングの実績と成果を引き継ぐ形で現在に至っている（-2000-九州環境教育・久住高原ミーティング実行委員会、2000）。また、久住のコンセプトは、ゆるやかで実りのあるネットワーク、多様性の共存と開かれた環境教育の場の創造、ニュートラルの保持として運営している。

行政主導型から住民主導型への運営のシフトは、ひとつのモデルとなるであろう。運営が市民へ移行したことで、今後のミーティング開催予算を参加費や助成金等から確保するなど、新たな課題の解決策や工夫を実行委員会の自発性に期待したい。また、行政側も引き続きミーティングをバックアップし、ミーティングによる市民ネットワークを効果的に生かせるような地域づくりや環境に配慮した社会づくりに協働して取り組むことを期待したい。自発的な市民とコーディネーターとしての行政との、バランスがとれたパートナーシップによる展開を注目していきたい。

青年ミーティング

各地方ミーティングとは違い対象を若い世代に設定されたミーティングであり、過去1997年と1999年の2回開催されている。同世代との柔軟な姿勢によるディスカッション、ワークショップ、交流を通じて未来への「共育」について語り合い、各人の今後の糧となる「きっかけづくり」の場として機能している。第1回では「いままでの10年 これからの10年 それぞれの環境教育」と題して、日本における現在までの環境教育の流れと問題点について整理し、これからの環境教育について考え、環境教育という広い領域の中で自分自身が今後進むべき方向を探った（第1回環境教育青年ミーティング実行委員会、1997）。

1987年に環境教育を唱えた清里ミーティング

から10年後に青年ミーティングを開催したことの意味は大きい。人材育成の観点から20代を中心とする世代が、行動のひとつとしてミーティングを開催・参加し、環境教育に主体的に関わろうとしていることは、環境教育の成果そのものである。また、ミーティング開催の背景には社会の環境教育に対する必要性が1987年と比較しても大きくなり、環境問題をはじめとする諸問題は、解決どころかより深刻なことをも意味している。

今後も青年ミーティングに対する期待と希望は大きく、ミーティングを契機とした各分野での青年の活躍とその成果が楽しみである。

中叡 石川 ミーティングと今後の可能性

1. 概要

2000年11月10～12日にかけて石川県白峰村にて、「第4回環境教育ミーティング中部2000inいしかわ(主催:環境教育ミーティング中部2000inいしかわ実行委員会)」が開催された(参加者約120名)。目的は中部ミーティングの基本目的を踏襲するとともに、北陸及び石川県での地域ネットワークの構築と環境教育の普及である。おおまかなプログラム構成としてオープニングコンサート、基調講演、公開プログラム、分科会、実践報告、ゲストへの質疑応答を主な柱とした。オープニングコンサートには登本貴夫さん(夢弦工房)による手作り楽器の演奏、基調講演にはシャーリー・スペンサーさん(ヨセミテ自然学校インタープリター)をお迎えして、「アメリカでの自然体験型環境教育の現状 子どもを中心に」として講演していただいた。一般参加者対象の公開プログラムは11設定し(一般参加者127名)、午後からのミーティング参加者による5つの分科会に対応する内容を実施した。実践報告では北陸で活躍しておられる松田敏明さん(学校法人きのくに子どもの国学園)と、山本茂行さん(富山市ファ

ミリーパーク)にそれぞれ「生活体験学習-よりよい生活を作り出す子どもたち-」、「動物園での環境教育」として報告していただいた。

2. 効果と課題

今回のミーティングは、今後の北陸における環境教育の発展に寄与するとともに、ひとつの契機となったと実感している。それは開催に向けた実行委員・運営委員会設立準備からの人的な中部・地域ネットワークの構築であり、開催期間中における多くの参加者との交流であり、共催である石川県や白峰村という行政や地域に対する環境保護や地域振興の提案であった。また、ミーティングに関わった多くの人の様々な思いを、ミーティングというひとつの形にできたことの意味は、開かれた環境教育・学習の場としてのモデルとなったであろう。また、ミーティングの準備プロセスにおける様々な場面での合意形成作業は、目的達成のための環境教育そのものであった。参加者の中には、ミーティングによるネットワークからある事業の企画を実施したことや、就職などが効果として認められる。

しかし、ミーティング終了後の現在、ネットワークや知識・経験を生かすも殺すも参加者だけという状況である。一過性のものとしなないためにも、今後の課題としてフォローアップの検討をしなければならない。ひとつの方法としてメーリングリストの運用が現在検討中である。また、中部という広域エリアでのネットワークによる実働は現実的に難しく、細分化された地域レベルでの環境教育・保護活動につなげるためにも、同様な石川ミーティング(仮)実施の検討もできる。

ミーティングをより効果的で実働的なネットワークや市民活動の広がりとするためにも、今後のさらなる行政、市民、企業、学校、専門家を含めた社会づくりが求められる。

おわりに

現在まで様々な場面におけるミーティングや関連集会など、事後における報告はあるものの、成果については不透明なものも少なくない。今後は全国へ広がったミーティング機能の検証として、成果の調査やモニタリング等が求められる。また、集約的組織である(社)日本環境教育フォーラムには、各ミーティングの情報の収集と提供、開催状況・特徴の調査とその有効的活用などを求めたい。

ミーティングは、市民やボランティアを中心とする多くの実施者と参加者の主体的な関わりと、自発的な行動によって支えられている。しかし、ミーティングの惰性的な継続や目的の希薄化には注意しなければならない。開催趣旨やその目的に即した各開催地の諸条件に対応した運営やスタイルなどを毎回検討すべきである。

引用文献

- 2000-九州環境教育・久住高原ミーティング報告書。2000。九州環境教育・久住高原ミーティング実行委員会。p.2-5。
- 川嶋 直。1998。就職先は森の中。小学館。東京。p.145-164, p.179-183, p.196-204。
- 川嶋 直。2000。石川県主催事業：平成12年度インタープリター養成セミナー配布資料。環境学習のための人づくり・場づくり。1995。ぎょうせい。東京。p.10-11。
- 環境教育東北ミーティング98報告書。1998。環境教育東北ミーティング98実行委員会。p.2。
- 環境教育ミーティング99報告書。2000。環境教育ミーティング99実行委員会。p.86
- 環境教育ミーティング中部98報告書。1998。環境教育ミーティング中部98実行委員会。p.53。
- 清里環境教育フォーラム実行委員会編。1992。日本型環境教育の「提案」。小学館。東京。p.223-288, p.406-409, p.419-432。
- 千刈ミーティング実行委員会。2001。ホームページ(<http://sengarimeeting.tripod.co.jp>)より引用。
- 第1回環境教育青年ミーティング報告書。1997。第1回環境教育青年ミーティング実行委員会。p.1-2。
- 第2回清里環境教育フォーラム報告書。1989。清里環境教育フォーラム実行委員会。p.13。
- 中・四国環境教育ミーティング98報告書。1998。中・四国環境教育ミーティング98実行委員会。p.76。
- 中・四国環境教育ミーティング99報告書。1999。中・四国環境教育ミーティング99実行委員会。p.2。
- 丸山環境教育事務所。1996。北海道環境教育ミーティング1995年度活動報告資料。